

令和7年10月14日

貝塚市議会議員 殿

視察報告書

公明党議員団

堺谷 裕

日 時： 令和7年10月9日（木）～10月10日（金）

場 所： ライトキューブ宇都宮

研修所名： 第87回 全国都市問題会議

成熟社会の都市のかたち～コンパクトで持続可能なまちづくり～

【概要】

令和7年10月9日（木）に宇都宮市にて開催された「第87回全国都市問題会議」に参加いたしました。本会議は「成熟社会の都市のかたち～コンパクトで持続可能なまちづくり」をテーマに掲げ、人口減少・成熟社会における都市が直面する課題と、それに対応するための具体的なまちづくり戦略について、基調講演および主報告、一般報告が行われました。

当日（10月9日）の講演内容は以下の通りです。

- ・ 基調講演：広井 良典 氏（京都大学名誉教授）
- ・ 主報告：佐藤 栄一 氏（栃木県宇都宮市長）
- ・ 一般報告：
 - 南 学 氏（東洋大学国際 PPP 研究所シニアリサーチパートナー）
 - 森本 章倫 氏（早稲田大学理工学術院教授）
 - 大西 秀人 氏（香川県高松市長）

基調講演：人口減少・成熟社会のデザイン（広井 良典 氏）

広井氏の講演では、人口減少をネガティブに捉えるのではなく、「地域の良さ、あるもの探す」というプラスの価値を見出すポジティブな思考が大切であることが強調されました。

主報告：人口減少社会に対応する都市の構造改革（佐藤 栄一 氏）

宇都宮市長は、100年先を見据えた「ネットワーク型コンパクトシティ（NCC）」の形成に取り組む重要性を強調されました。

一般報告：「縮充」発展による公共施設マネジメント
（南 学 氏）

南氏は、公共施設マネジメントにおける「拡充」から「縮充」への発想転換を提唱されました。

一般報告：次世代交通とコンパクトで持続可能なまちづくり
（森本 章倫 氏）

森本氏の報告では、人口減少社会における都市構造の転換において、交通システムの重要性が論じられました。

第2日 10月10日（金）

パネルディスカッション

【テーマ】

成熟社会の都市のかたち～コンパクトで持続可能なまちづくり

【コーディネーター】

埼玉大学大学院人文社会科学研究科教授 内田 奈芳美 氏

【パネリスト】

（株）みちのり HD 代表取締役 グループ CEO

（兼）関東自動車(株)代表取締役社長 吉田 元 氏

まちなか広場研究所主宰 山下 裕子 氏

北海道室蘭市長 青山 剛 氏

鳥取県米子市長 伊木 隆司 氏

閉会式

次期開催市 市長挨拶 山形県山形市長 佐藤 孝弘 氏

閉会挨拶

公益財団法人日本都市センター理事長 香川県高松市長 大西 秀人 氏

【感想と所見】

本会議で発表された内容全体を通して、「次世代のために、今やるべきことをやる」という共通のメッセージが強く打ち出されていました。人口減少・成熟社会という避けて通れない課題に対し、悲観論ではなく、「縮充」や「ネットワーク型コンパクトシティ」といったポジティブな発想転換を通じて、持続可能な未来都市像を描く取り組みが紹介されました。

宇都宮市の LRT 整備は、市長が 1,200 回を超える市民との対話と国・県との連携を経て完成にこぎつけたと報告されており、実際、開業後の利用者数は予測通りまたは休日には予測の 2～3 倍で推移するなど、成功を収めている点は特筆すべき事例です。

持続可能なまちづくりを実現するためには、中心市街地や居住誘導地域への集積を促すとともに、市民との徹底した対話と合意形成を重ね、50 年先を見据えた政策を着実に実行していくことが重要であると再認識しました。

日光東照宮 観光分野における広域連携事例視察報告

【視察目的】

世界文化遺産「日光の社寺」の中核である日光東照宮を視察し、その歴史的背景、文化財の維持管理体制、および現代の観光客受け入れにおける、地域・組織・地理的範囲を超えた「広域連携」の具体的な事例を抽出し、今後の地域観光戦略立案のための知見を得ることを目的とする。

【概要】

日光東照宮は栃木県日光市に位置する神社であり、江戸幕府初代将軍である徳川家康公を神格化した東照大権現を主祭神として祀っています。創建は元和3年

(1617 年) ですが、現在見られる豪華絢爛な社殿の多くは、三代将軍徳川家光が主導した寛永 13 年 (1636 年) の「寛永の大造替」によるものです。

【感想と所見】

日光東照宮への視察を通じて、この場所が単なる地域の神社ではなく、徳川政権下における国家的なプロジェクトであったことが改めて明確になりました。

特に「広域連携」という視点から見ると、歴史的な権威に基づくトップダウンの連携と、現代の観光ニーズに応えるボトムアップ・水平的な連携の二層構造が確認されました。

17 世紀、福岡から石材を運び、京・大坂から職人を集めた事例は、当時の最高の権力者が全国の資源を動員した、地理的な隔たりを超えた壮大な広域連携の成功例です。この歴史的な背景自体が、現代の観光コンテンツの「ストーリー性」を担保しています。

現代においても、二社一寺の枠を超えた世界遺産の共同管理、複数の交通事業者が IC カードシステムを共有し、自治体と協力してパークアンドライドを実施する交通対策、そして専門の案内人組織（日光殿堂案内協同組合）によるサービス提供など、多岐にわたる組織間連携が、日光という観光地が国際的な水準を維持する基盤となっていると感じました。

歴史的遺産を維持し、同時に年間を通じて増加する国内外の観光客を円滑に受け入れるためには、このように分野横断的かつ地理的制約のない連携が不可欠であり、これは他の観光地域にとっても重要な模範となる知見であると考えます。